

## 2つの哲学史をつなぐもの イギリス哲学史研究を例として

西内 亮平

### 1. はじめに

私たちが哲学の訓練を受け、その研究を進めていくにあたり、哲学史や古典と呼ばれる文献と向き合うことを（大なり小なり）余儀なくされる。筆者の場合は、もともと心の哲学を学びたくて哲学の門を叩いたが、「まずは古典を読むことから始めよ」という指導の下、手始めにデイヴィッド・ヒューム(David Hume, 1711-1776)の『人間本性論』を読むことになり、その巡りあわせから研究者としての現在が形作られている。このような例は他にいくらかでも挙げられようが、私たちはさまざまなきっかけで古典や哲学史・解釈史と向き合うことになる。しかし、哲学研究と哲学史研究はどのような関係にあるかは、私たちを常に悩ませる問題であり、近年再び大きな注目を浴びようになっている。本稿では、主としてイギリス哲学史研究を例にとりながら、リチャード・ローティ(Richard Rorty, 1931-2007)の整理による「合理的再構成(rational reconstruction)」、「歴史的再構成(historical reconstruction)」という2つの哲学史理解と、その間隙をつなぐ道筋を検討したい。

古典との向き合い方としてまずは、現代的な関心から（時として時代錯誤のリスクを負いつつ）過去の哲学者を合理的に再構成しながら解釈するアプローチが挙げられる。例えば、20世紀のイギリス哲学史研究では、分析哲学の隆盛を背景に、言語哲学やメタ倫理学などで流行りの説（あるいはその萌芽）をロック、バークリ、ヒュームらに見出す研究が多く存在した。この種のアプローチは、古典を読むことが現代の哲学者に着想を与えて、新たな哲学的発明に貢献してきたといえるだろう。しかし一方で、そのような読み方はロック解釈、ヒューム解釈としては不正確さを含む場合もあるように思われる。そのため、ローティが「歴史的再構成」と呼ぶような、哲学者をなるべく当時の文脈に埋め込み歴史的に解釈するアプローチが対照を成すものとしてしばしば取り上げられる。

こうした合理的再構成と歴史的再構成という2つのアプローチに対しては、ある種の「住み分け」を提案することも可能である（むしろこの「住み分け」こそ、私たちが普段、学会などで実践しているふるまいなのかもしれない）。しかし本稿では、あえて両者の接続にも注目してみたい。その際の出発点となるのは、過去の哲学者たちと同じく、現在の私たちの視点もまた歴史的な構成物であると自覚することである。その上で、現在の自分の立場を正当化するために過去の哲学者たちと対話する「精神史」の必要性を説くローティと、現代の私たちが持つ

「概念」や「問い」がいかんにして歴史的に構成されたのか、その「問い」がいかんにして可能になったのかを主題とするイアン・ハッキング(Ian Hacking, 1936-2023)を検討する。以上の検討により、私たちの哲学史研究の実践を(さしあたり)4つの哲学史理解から捉え直し、哲学及び哲学史研究のあるべき姿を考える一助とするのが本稿の目的である<sup>1</sup>。

## 2. 合理的再構成としての哲学史・解釈

先述の通り、20世紀英米における哲学史研究は、隆盛する分析哲学の影響を大きく受けた。それにより、現代の言語哲学やメタ倫理学などの成果を古典解釈へと積極的に活用したり、また逆に、古典の読解からインスピレーションを受け、新たな哲学理論を構築したりするものが多く出たのである。このような成果をローティは「合理的再構成」と呼び、代表的なものとして、P. F. Strawson, *The Bounds of Sense: An Essay on Kant's 'Critique of Pure Reason'* (1966)、J. Bennet, *Locke, Berkley, Hume: Central Themes* (1971)、A. J. Ayer, *Language, Truth and Logic* (1936)を挙げる。彼らに共通する態度としてローティが見いだすのは、「合理的再構成の支持者は、『彼らが論じた諸問題に関する今日の最良の仕事』に照らして、過去の偉大な哲学者たちを見ること」である。ここで重要なのは、現代の解釈者と過去の哲学者の間で「問い」が共有されていることがほとんど論じられぬままに自明な前提とされがちであり、その結果として、現代の水準に照らして「答え」の成否が対等に語られがちな点にある<sup>2</sup>。

では、「合理的再構成」派と見なされた当人たちは、古典との向き合い方を一体どのように認識していたのだろうか。例えばジョナサン・ベネット(Jonathan Bennett, 1930-2024)は、自身の立場を「同僚的アプローチ(the collegial approach)」と呼び、「〔過去の哲学者は、自分にとっての〕同僚、論争相手、学生、教師である、という精神のもとテキストを研究し、そこから可能な限り多くの哲学的洞察を学ぼうとする」態度だと考えている<sup>3</sup>。ベネットがこのようなアプローチを自覚的に採用する背景には、歴史的な文脈や影響関係を調べることに終始する「ただ物知

---

<sup>1</sup> したがって本稿は、「哲学史の哲学」のなかでも特に「哲学史研究の哲学」を主題とすることになる。

<sup>2</sup> ローティは、合理的再構成において自明視されがちな、哲学的な「問い」の共有について「記述的用法の場合、『哲学的問い』という言葉は、現代のある『学派』が今論じている問い、もしくは、通例『哲学者』とされている歴史的人物のすべてでないし多くが論じてきた問いを、意味することができる」と述べている(Rorty (1984), p. 58/124 頁)。また、合理的再構成によってなされる現代目線での判定についても、この立場が「過去の偉大な哲学者の著作の中に有意義な真理もしくは含蓄のある重要な誤り」を見いだそうとしていると指摘する(Rorty (1984), p. 55/118 頁)。

<sup>3</sup> Bennett (2001), p. 1 (引用中の亀甲括弧は本稿による補いを示す)。同所でベネットは自らの立場のルーツとしてポール・グライス(Paul Grice, 1913-1988)の言葉を引いている。「私は、今は亡き偉大な人々を、そのまま生きているかのように、つまり、私たちに今言うことができる人々として扱う。」(Grice, P. (1986), Reply to Richards. In R. E. Grandy and R. Warner (Eds.), *Philosophical Grounds of Rationality: Intentions, Categories, Ends*, p. 66, Clarendon Press)

りな」研究に対する批判の念がある。

スピノザの意図を見出す際に、彼が何を読んでいたのか、誰の問題に関心を抱いていたのか、等々を知ることが助けになる可能性はある。しかし、〔知的〕背景をこのように掘り下げることが収穫逓減の法則に従っている。……彼の直接的な背景を適度に押さえておけば、彼のテキストと直接に格闘する方がそれを正しく理解する見込みが高まる。きっと私はスピノザの哲学的祖先に対する不注意ゆえに間違いをしでかすだろうが、しかし私は、その犠牲を払う代わりに、エネルギーの大半をスピノザ自身のテキストを哲学的に吟味することに注入することから生じる利を得るであろう。<sup>4</sup>

すなわちベネットによれば、歴史的な脈や知的背景についての知識は、（スピノザなりヒュームなり）過去の哲学者を理解するのに役立つが、その知識は増えていくにしたがって、いつそう細かなものとなっていき、知ることによって得られる利益は労力に見合わぬものとなっていく。そうであるなら、背景知識の不足のせいで間違いを犯すリスクは引き受けつつ、テキストの解釈そのものに力を割く方が哲学的に得るものが大きい、と判断しているのである。

テキストそのものへと集中する合理的な再構成に対する最も典型的な批判は、「自分たちの問題や語彙を過去の人々に押し付けて、彼らを対話の相手にするという時代錯誤」を犯しているのではないかというものである<sup>5</sup>。現代の私たちと過去の哲学者たちの「問い」ははたして同じなのだろうか。もし「問い」が完全には共有されていないとすれば、「プロクルステスの寝台」よろしく「私たちの問い」に都合の良い読み方・切り取り方をしているのではないだろうか。ローティの言葉を引くならば、「分析的哲学史家は、テキストに手を加え、それを哲学雑誌で今論じられているような命題の形に変えてしまうと、しばしば非難されている。今、言語哲学やメタ倫理学で行われている論争の、いずれかの陣営に、むりやりアリストテレスやカントを配すべきではない、というわけである」<sup>6</sup>。

この種の応酬の例として、ベネット自身も当事者となったヒューム解釈上の論争を取り上げてみよう。かつて標準とされたベネットらの解釈では、ヒュームは『人間本性論』第1巻において「意味の観念説」を採用しており、言葉の意味とはそれが表す観念であるとされていた。

意味に関するヒュームの見解は必然的にロックの見解そのものである。すなわち、ある言葉を理解するというのは、ある種の「観念(idea)」とそれを結びつけるということである。

7

---

<sup>4</sup> Bennett (1984), p. 16, 引用は松田(2017), pp. 14 から。

<sup>5</sup> Rorty (1984), 49/105-6 頁。

<sup>6</sup> Ibid.

<sup>7</sup> Bennett (1971), p. 222. 同様の解釈としては Flew (1961), p. 22 など。

しかしこうした解釈に対しては、「言語の意味とは何か」という現代の関心を過去に投影したものに過ぎないという批判<sup>8</sup>、または『人間本性論』の第1巻のみにテキストをしぼった視野の狭い解釈であるという批判などがなされたのである<sup>9</sup>。ここで本稿の主たる関心は前者の批判にある。やはり問題になるのは、解釈者が取り組もうとしている「問い」が、解釈者と過去の哲学者との間で共有されているか否かである。

しかしおそらく、「共有されていない」ことそのものはさほど問題ではない。私たちは昔なじみの素材を扱いつつ新しい「問い」に向き合うこともできるはずである。仮にそこで誤読や時代錯誤が起ころうとも（むしろ「必然的にそれが起こる」と述べているわけではない）、魅力ある過去の哲学者のテキストに触発され、魅力ある新しい「答え」が提出されればそれは哲学にとって創造的な営みとなるだろう。井筒俊彦(1914-1993)は、このような営みを「創造的誤読」と呼び、過去のテキストに新たな生命を宿らせる現代西洋哲学に顕著な戦略として高く評価している<sup>10</sup>。

では本当に問題となるのは、言い換えれば、生産的ではない混乱を生み出す源とは、一体何であるのか。それは現代的な関心・解釈者自身の「問い」と、過去の哲学者の関心・「問い」との境界を意識しないことである。本節の結論としてあまりに「当たり前だ」と受け取られるか

---

<sup>8</sup> 例えばハッキングは次のように述べている。「かつての経験論者は確かに、意味に関する観念説や指示対象説、あるいは行動説を指示する形にまとめ上げることができるような、さまざまな多くの見解を表明している。けれども彼らにとっては、現代の哲学者たちが意味の理論と呼ぶところのものは、大した問題とはならなかった。……我々の同時代人たちは、しばしば「言語の哲学」を「意味の理論」と等置する。このことは、良くてせいぜいのところ、歴史研究の中に貧弱なアナクロニズムを持ち込むことである。……言語は問題である、しかし、意味は問題ではないのではないかと私は思うのである」(Hacking (1975), p. 43/82-3 頁)

<sup>9</sup> 例えばポール・アーダルは次のように指摘している。「対人コミュニケーションをする社会的状況における言語の役割についてヒュームがどう考えていたか理解するには、『人間本性論』第3巻に特有の議論を踏まえる必要がある。第1巻には公共の事象として、そしてコミュニケーション手段としての言語に関する議論が欠けていることから、『ヒュームは言葉を心像という形で持つ私的な意味と考えていた』ことが示されるなどと考えるべきではない。ヒュームはこの見解と両立しないことをきわめて多く述べており、そうした発言を単なる不注意とみなすことは到底できないのだ」(Árdal (1977), pp. 58-9)

<sup>10</sup> 「現代の創造的思想家たちも、己れの哲学的視座の確立のために、あるいは少なくとも、強烈に独創的な思索のきっかけとなるであろうものを求めて、過去を探る。……過去のテキストの「読み」を出発点として、その基盤の上に思惟の創造性を求めることは、現代西洋哲学の一つの顕著な「戦略」である。厳密な、文献学的方法による古典研究とは違って、こういう人たちの古典の読み方は、あるいは多分に恣意的、独断的であるかもしれない。だが、このような「誤読」のプロセスを経ることによってこそ、過去の思想家たちは現在に生き返り、彼らの思想は澆漑たる今の思想として、新しい生を生き始めるのだ。ドゥルーズによって「誤読」されたカントやニーチェは、専門家によって文献学的に描き出されたカントやニーチェとはまるで違う。デリダの「戦略的」な解釈空間にたち現われてくるルソーやヘーゲルは、もはや過去の思想家ではない。」(井筒 (2019), 264-5 頁)

もしれないが、歴史上においても現代の私たちの身の回り、あるいは私たち自身においても、このような混同はありふれており、枚挙にいとまがない。むしろ両者の「問い」が重なる場合もあるだろうが、たとえ異なっていたとしても、私たちは軽いはずみでいつでもそのような過ちに陥りかねないのである。だからこそ、言い古されたような戒めを改めて述べたとしてもまだいくらか意味はあるだろう。畢竟、解釈者は自身と受け取り手を混乱させないため、「過去の哲学者が当人の関心の下に述べていること」と「解釈者の関心の下、過去の哲学者が述べていることの解釈を通じて練り上げた解釈者自身の見解」とを区別しなければならない。もちろんここでは、「哲学者当人の問い」なるものを解釈者は本当に把握しうるのかという問題が生じる。「哲学者当人の問い」はそれ自体が解釈の対象となるのであり、これを探求するのが「歴史的再構成」の大きな役割であろう。したがって、合理的再構成にとっても歴史的再構成との協働は欠かせぬものとなるのである。

### 3. 歴史的再構成としての哲学史・解釈

ローティは哲学史や解釈における「歴史的再構成」の意義を次のように述べている。「彼ら〔過去の哲学者〕を〔現代の解釈者とは〕別の言葉、つまり、彼ら自身の言葉でもって記述することにも、それなりの理由がある。過去の哲学者が生きていた知的状況……を蘇らせるのは、有益なことである」<sup>11</sup>。このような歴史的再構成の範例として彼が取り上げるのは、政治思想家クエンティン・スキナー(Quentin Skinner, 1940-)である。スキナーも、前節で取り上げた時代錯誤の陥穽を指摘し<sup>12</sup>、(合理的再構成派だけでなく)歴史的再構成に取り組んでいるつもりで解釈者にとってすら「自覚が破滅的なほど欠如している」と、いっそう強く警鐘を鳴らしている<sup>13</sup>。スキナーは、ジョン・ロック『統治二論』の解釈に取り組む思想史家を例に挙げ、次のように語る。

この歴史家は、そこから、「同意による支配」の概念を、ロックの議論を記述するためのパラダイムとして用いるように導かれるかもしれない。そうなると、前と同じ危険が生ずる。今日、われわれが同意による支配について語る時、通常、最良の統治組織に関わる理論を考える。したがって、このような概念を思い浮かべながらロックのテキストに向かった時、そこでは何かそれらしい理論が不様にしか提示されないと見いだすのは自然であり、

---

<sup>11</sup> Rorty (1984), p. 50/107 頁

<sup>12</sup> 「思想史にとりわけ目立つ概念上の偏狭の別な一形態は、観察者が、所与の作品の直感的理解を記述する時に無意識のうちに自らの有利な位置を誤用することである。すなわち、歴史家がある議論を概念的に再構成する際に、自分にとって異質な要素を、一見明快ではあるがしかし誤解を招きがちに馴染みのものへと置き換えてしまう危険が常に存在する。」(Skinner (1969), p. 27/80 頁)

<sup>13</sup> Ibid.

またむしろ決定的なまでに容易である。しかし、その種の理論は、ロックが同意による支配について語った時、彼が考えていたものではまったくなかったということを示す決定的な証拠がある。現在では、同意の概念に関するロックの関心は、正統な社会の起源との関連においてのみ現れることが明らかとなっている。このロックの同意概念は、われわれが同意を支持するための議論と見做すべきではおよそなく、その概念がたまたまロックの議論の中にあるだけなのである。<sup>14</sup>

このような時代錯誤の危険性を声高に叫ばれたり、実践例を挙げられたりするとき、私たちは当然「ではどうせよというのか？」との疑問が浮かぶ。ローティによれば、ここでスキナーが挙げる格率こそが歴史的再構成を制約するものであるという。

行為者本人が、自分の言おうとしたことや行ったことの正しい記述と認める気になれないものを、本人の言おうとしたことや行ったこととして、言い立てることはできない。<sup>15</sup>

このローティが「歴史再構成の格率」と呼ぶものは何を指したものののだろうか。スキナーの立場をもう少しだけ見てみよう。スキナーの見解は批判者との応酬により、徐々に修正が加えられていったものの<sup>16</sup>、特徴の一つとして、オースティン(John L. Austin, 1911-1960)の言語行為論を援用しつつ「意味と併せて発語内的力(illocutionary force)の把握がテキストの理解には不可欠」とする点が挙げられる<sup>17</sup>。スキナーによれば、過去の哲学者<sup>18</sup>を解釈するには、発話に関わる哲学者本人の意図を探り、その発話が行われた文脈において有する発語内の力の範囲を特定し、哲学者本人の意図した発語内的行為を同定することが欠かせないものとなる<sup>19</sup>。

この発語内行為の同定作業にさまざまな困難が待ち受けていることは認めなければならない。スキナーの挙げる例だと、哲学者本人が自らの意図をうまく説明できていない場合<sup>20</sup>や、意図を推測する文脈を全く欠く場合<sup>21</sup>などがある。それでも、あるだけの手がかりから、「当該主体の動機や信条、そして一般的には、発言それ自体のコンテキストを調べることによって、意図の

---

<sup>14</sup> Skinner (1969), p. 28/82 頁.

<sup>15</sup> Skinner (1969), p. 28/83 頁. ただし訳文は、Rorty (1984), pp. 50-1/108 頁から引いた。

<sup>16</sup> 本稿ではその詳細に立ち入る余裕はないので、さしあたり関口(1995)や森(2002)などの先行研究を参照されたい。

<sup>17</sup> Skinner (1969), p. 46/109 頁.

<sup>18</sup> 念のため申し添えておけば、スキナー自身は議論を哲学者や哲学史に限定しているわけではない。

<sup>19</sup> 森(2002)のとくに pp. 89-90 を参照のこと。ただし、スキナーはこれだけで解釈として十分であるとは考えていない点には注意が必要である。「解釈者の仕事の中には、書いたことを書いた際の著者の意図の再現が含まれていなければならない。」(Skinner (1972), p. 405/159 頁)

<sup>20</sup> Skinner (1969), p. 28/83 頁.

<sup>21</sup> Skinner (1988), p. 280/352 頁.

帰属認定についての一層の裏づけを追求」し、その蓋然性を高めていくことはできる<sup>22</sup>。

ローティによる整理に戻ろう。ローティにとって、合理的再構成と歴史的再構成とは競合するものではなく、ただ役割がことなるものとして捉えられる。前者は「われわれ現代の哲学者が自分の問題を考え抜くのに必要」であり、後者は「これらの問題が祖先には見えていなかったことを明らかにし、それによって、それらが歴史の産物であることを思い出させるのに必要である」<sup>23</sup>。したがって、両者は「ディレンマを構成しない。われわれは、これらのいずれをも、行わなければならない——但し、別々にではあるが」<sup>24</sup>。ローティの提案する合理的再構成と歴史的再構成の「分業」論・「住み分け」論は、前節の結論をさらに明確にし、私たちの現状にもよく当てはまっているように思える。すなわち、私たちは個人としても今自分がどちらの作業に（主として）従事しているかを自覚する必要がある、また研究者の集団としてもそれぞれの作業の成果を互いに参照しつつさらなる研究を進めることができる。ここでの結論を重ねて言えば、「これらの仕事が別個のものであるということは重要なことであり、それらは別個のままに維持されなければならない」のである<sup>25</sup>。

こうした分業論は、ある意味で過去の哲学者たちの「問い」と現在の解釈者の「問い」との断絶を強調するものである。しかし、本当に両者は交わらないのだろうか。必ずしもそうではない。まず言えるのは、私たちは両方の関心を同時に抱くことや、両者の関心が重なることがあり得るということである。さらに、ここでいっそう重要だと思われるのは、（過去の哲学者と同じく）私たち自身も歴史的な産物であり、ある特殊な知的文脈に置かれた存在だということである。この文脈を伸ばしていけば、両者はやがて接続することもあるだろう。ただし、ここでは「問い」は在りし日の姿のままでは限らず、なにがしかの変化を被っている場合が多いであろうし、そしてまた、ある全く新しい「問い」が生まれたことが確認される場合もあるだろう<sup>26</sup>。いずれにせよ、いかなる「答え」が提出され、その成否を見定めるといふ以上に、いかなる「問い」が存在するかが鍵となりそうである<sup>27</sup>。この問題を検討するため、続く第4節ではローティの（第3の哲学史の方法である）「精神史」について、そして第5節ではローティを批判しつつまた別の角度から「問い」の成立史を扱うイアン・ハッキングの「歴史的存在論」について見ていきたい。

---

<sup>22</sup> Skinner (1988), p. 280/353 頁.

<sup>23</sup> Rorty (1984), pp. 67-8/143 頁.

<sup>24</sup> Rorty (1984), p. 49/106 頁.

<sup>25</sup> Rorty (1984), p. 68/143 頁.

<sup>26</sup> この場合は「断絶」それ自体が検討の対象となろう。

<sup>27</sup> 例えば、スキナーもコリングウッド(R. G. Collingwood, 1889-1943)やオースティンへの依拠を明示しながら、「思想の歴史は、規準としての地位を与えられた一定の諸問題に対する解答の試みの連続と見るべきではなく、解答ばかりでなく問題もまた頻繁に変化してきたことを示すエピソードの連続と見るべきだ」と述べている(Skinner (1988), p. 234/260 頁)。

#### 4. ローティの「精神史」と文化政治

ローティは、合理的再構成・歴史的再構成に並ぶ哲学史の第3の方法として「精神史(Geistesgeschichte)」ないし「精神史物語(geistesgeschichtlich stories)」なるものを提示する。これは、合理的再構成や歴史的再構成から区別されるものではあるが<sup>28</sup>、両者の成果を土台としつつ、それらを総合するものでもある<sup>29</sup>。

精神史は、問題解決のレベルよりも、問題構制(problematics)のレベルにおいて、仕事をすすめる。それは、〈過去の偉大な哲学者の解答や解決がどの点において現代の哲学者のそれと一致するか〉を問うのではなく、「なぜ人は……という問いを自分の思想の中心に据えるべきであったのか」、「なぜ人は……という問題を真剣に取り上げたのか」、といった問いを追究することに、多くの時間をかける。<sup>30</sup>

引用文中にあるように、前節で確認された「問い」を主たる関心とする点が共有されているが、少し細かくみるとローティの場合は、「問い」の内容だけでなく、その「問い」が生じた理由や背景を捉えようとしているようだ。つまり、ローティの精神史は、過去の哲学者を登場人物とした、現在の「問い」に至るまでの理由の物語（あるいは、「問い」の形成史）を創り出そうとする。

精神史家は、歴史的人物からなる配役を決め、劇的な物語を構成することによってこれを行う。この物語が示すのは、〈われわれは、今自分たちが避けがたい深遠な問いと考えているものを、どのようにして問うようになったか〉ということ、これである。<sup>31</sup>

ここで確認しておきたいのは次の2点である。第一に、ローティが精神史において物語るものは、現在に至るまでの「問い」とそれを表現する「語彙」の変化であるという点、そして第二に、そのような物語を作り、登場させるべき哲学者を選別するのが「自分の今の在り方を正当化する」ためであるという点である<sup>32</sup>。この2点は、哲学史の哲学に限らず、ローティ哲学全般と密接なつながりを持つと思われる<sup>33</sup>。例えば、ローティが最晩年に書いた「知的自伝」では、

---

<sup>28</sup> Rorty (1984), p. 68/143 頁.

<sup>29</sup> Rorty (1984), p. 61/129 頁.

<sup>30</sup> Rorty (1984), p. 57/121 頁.

<sup>31</sup> Rorty (1984), p. 61/128 頁

<sup>32</sup> Ibid.

<sup>33</sup> 以降で扱うローティの主張は、いくらか変遷はありながらも『哲学と自然の鏡』や『偶然性・アイロニー・連帯』といった主著と密接につながったものだと本稿は考える。さらに本稿では、ローティの哲学史における「精神史」と哲学における「歴史主義」をほぼ言い換え可能なものとして扱っている。こうした同一視が許さ

分析哲学と対置させる形で、哲学におけるある種の「歴史主義」の重要性が説かれており、それは哲学を「問題を解決するのではなく人間の過去と人間の可能な未来との関係に関する物語を語るもの」と見なしている<sup>34</sup>。

このような精神史や歴史主義により、私たちは「問い」や「語彙」の変遷を知ることができるだけでなく、「実践的 중요さをもたなくなった問題に頓着しないよう説得」される<sup>35</sup>。だからこそ、ローティにとって重要とみなされるべき哲学者とは、歴史を振り返りつつ、「古い駒をあちこち動かすのをやめ、その代わりにわれわれが行うべき新たな言語ゲームを提案する」者である<sup>36</sup>。私たちの精神史は、お仕着せの物語から、自分自身の物語へと常に書き換えの機会に開かれている。しかしその書き換えは、一意になされるものではない。ローティにとっては、そのような精神史に多様性がもたらされることが重要であり、この多様性により生じる精神史間の競合があればこそ、「熱のこもった対話のみが可能にするあの共同体の感覚」を私たちは失わずにするという<sup>37</sup>。ローティは、歴史主義の手本としてヘーゲルを賞賛し、自らを「新ヘーゲル主義的全体論者」とまで呼称しながらも<sup>38</sup>、共同体の連帯を生む物語や語彙の複数性を重視するがゆえに、歴史を収斂するものとして捉える点においてはヘーゲルを批判したのである。

ヘーゲルは歴史を、ある点、つまり精神が完全に自覚的になる点に収斂するようあらかじめ運命づけられているものとして描く限りにおいて、「哲学はその時代を思想の内に捉えたものである」という自らの主張が含意することをはぐらかした。筋の通った歴史主義的見解は、知的進歩や道徳的進歩を、なにかにより一層近づくこととしてではなく、万華鏡がより大きくよりカラフルになり続けるような過程として思い描くであろう。<sup>39</sup>

かくしてローティにおいて哲学は「文化政治」の実践として捉え直される。それは、「語の用法の変更を提案したり新語を広めたりすることによって、行き詰まりを打開し、会話をもっと実り多いものにする」ことであり、「物事を正しく捉えるという目標を放棄し、個人の自己記述や文化の自己記述のレパートリーを拡大するという目標にそれを置き換えること」である<sup>40</sup>。ただし、物語や語彙の複数性を称揚するローティの主張を聞いていると、それらが増え続ける

---

れるか否か、本来であれば彼の主著とより慎重に照らし合わせる作業が求められるであろう。その課題には機を改めて取り組んでみたい。ここではさしあたり、「哲学と精神史の境界線……この境界線は実のところぼかさなければならぬと、私は思う」というローティの言葉を引くにとどめておく(Rorty (2007a), p. 22/230 頁)。

<sup>34</sup> Rorty (2007a), p. 18/224 頁.

<sup>35</sup> Rorty (2007a), p. 22/230 頁.

<sup>36</sup> Rorty (2007a), p. 22/231 頁.

<sup>37</sup> Rorty (1984), p. 74/157 頁.

<sup>38</sup> Rorty (2007b), p. 129/139 頁.

<sup>39</sup> Rorty (2007a), pp. 22-3/231 頁.

<sup>40</sup> Rorty (2007b), p. 124/132-3 頁.

だけで、その広がりへの規制が存在しなければ、物語や語彙の選択において私たちは相対主義に陥るのではないかという疑問を抱かれてしまうのも、彼の主張の中にそのような理解を招き易い要素が確かにあるからだと考えられる<sup>41</sup>。

## 5. ハッキングの「歴史的存在論」

ローティが自らの歴史主義を語るときには分析哲学そのものへの疑いを隠さないのに対して<sup>42</sup>、ハッキングは歴史主義を分析哲学と融合させようと試みる。ハッキングが哲学的分析の対象とするのは、概念である。ある概念の歴史を扱うのは、「その概念を有用なものにしたり、あるいはそれにまつわる問題を引き起こしたりしている原理を探求するため」である<sup>43</sup>。

ただし調べるのは、個人ではなく社会全体の中での概念の形成である。それは歴史を巻き込むことになる。この方法の適応対象は、われわれが現在直面している問題である。だから、ここで言う歴史とは、現在の歴史である。われわれの現在の考え方はいかにして作られたのか、その概念を形成した条件は現在のわれわれのものを見方をどのように制約しているかについての歴史である。こうした営み全体によって、概念が分析される。私にとっては、これこそ哲学的分析というものである。<sup>44</sup>

現在の私たちが直面する「問い」がいかに生じたかを理解するため、「問い」を構成する概念を歴史的に分析し、その発生・変化の歴史を辿ろうとするのである。「歴史的存在論(historical ontology)」と呼ばれるスタイルを、彼はさまざまな主題で実践していく。例えば、『確率の出現』では、近代的な確率概念が出現するための前提条件を明らかにし、この前提条件こそが確率概念の性質を規定した様子を描き出そうとした<sup>45</sup>。また、『言語はなぜ哲学の問題になるのか』では、17世紀の哲学においては「観念(ideas)」が哲学の問題となっていたのと同じ理由から、すなわち、「認識主体と認識されるものとのインターフェースの役割を果たしている」がゆえに

---

<sup>41</sup> 例えば、次節で扱うハッキングも「真理(truth)」概念をめぐるローティと自身との違いを指摘する(Hacking (2007), p. 39)。こうした「真理」をめぐるローティと批判者との論争は本稿で扱える範囲を大きく超えているので、ここではローティへの批判の評価は保留する。さしあたり、そのような真理や相対主義をめぐる批判からローティを擁護するものとして、例えば富田(2016)（特に第5章）や朱(2024)を挙げておく。

<sup>42</sup> Rorty (2007b), p. 126/135 頁。

<sup>43</sup> Hacking (2002), p. 68/155 頁。

<sup>44</sup> Hacking (2002), p. 70/158 頁。

<sup>45</sup> Hacking (2006). 分析対象としての「概念」及びその成立条件についてハッキングは次のように述べている。「概念とは、然るべき場所に位置付けられた語のことである。……言葉の用法はある一定の条件の下で出現し変化していくが、そもそもどのような使い方が可能なのかという可能性の範囲は、その条件によって決定づけられる。」(Hacking (2002), p. 68/155 頁)

言語は哲学の問題となっていることを<sup>46</sup>、観念から意味、そして文へと哲学の関心が移り行く歴史に沿って辿っていく。これは本稿第2節で取り上げたヒュームの意味論をめぐる論争とも重なりを持つ。17世紀においては、知識の素材と見なされた「観念」こそが哲学の関心を集めていた。観念は孤立した個人の自我と世界との仲介物となり、明晰判明なものである限りにおいては「あるがままで完全」なのであり、「問題が生じるのは、ただ人が思考の連鎖を言葉の連鎖によっておきかえるときのみである」<sup>47</sup>。さてハッキングによれば、こうした事情が変わり、哲学の関心が「意味」へと移り変わったのは、フレーゲが「意義(Sinn)」と呼んだ、思考の蓄積を後の世代へと伝えることができる「言語の本質的に公共的な側面」が見いだされたときであった<sup>48</sup>。

ハッキングの歴史的存在論は、「問い」の歴史の変遷や起源を辿るという点では、ローティと共通の視座を持つ。しかし、分析哲学との距離、あるいは哲学という営みの理解においては大きな違いが見られる。それに言及するハッキングの言葉を引けば次である。

〔ローティによれば〕分析哲学は基礎づけを行い、よい思想と悪い思想の弁別基準を与えるという試みの最終段階にあたる。分析／総合の区別をはじめとする概念装置群は混乱に陥る。真理の対応説は崩壊する。現実世界に当てはまるという概念そのものが空回りするようになり、さまざまな種類の実在論も反実在論も単なる戯言と化す。分析哲学の道具立てはどれもそんな、無用の長物のように見られるようになった。……

私がここで強調したいのは、ローティの取り消しは、哲学におけるプログラムやプロジェクトのたどってきた道筋を跡づけることで行われるということである。〔にもかかわらず〕彼は、哲学で用いられてきた概念群や、それらがいかに構成されてきたかには、それほど関心を払わない。<sup>49</sup>

やや大味な評価ではあるものの、ここでは概念分析という分析哲学の指針を（ローティとは異

---

<sup>46</sup> Hacking (1975), p. 187/290 頁.

<sup>47</sup> Hacking (1975), p. 17/41 頁.

<sup>48</sup> Hacking (1975), p. 50/93 頁. もっとも、こうしたハッキングの解釈に不満がないわけではない。例えば、第1節で言及した Árdal (1977)などを敷衍させればヒュームにおいても「言語の本質的に公共的な側面」なるものを見いだす余地はあるだろう。また（ややついでになるが）以下のヒューム評に至っては全くの的外れのように思う。「哲学者の中には何人か「プロ」の歴史家がいるのだが、彼らは哲学をやるときは歴史主義者にはならないというのが一般的な傾向のようである。「プロ」というのは、例えばヒュームである。彼は『イングランド史』を書いて、世界ではじめて本の売上げで金持ちになった人間である。……元祖ホイッグ主義者にふさわしく、彼の哲学に歴史の要素は見られない。昔の哲学における歴史主義というのは、ヘーゲルのようなアマチュアの仕事であった。そして今日、新しい歴史主義をやっているのも（ローティや私のような）アマチュアなのである。」(Hacking (2002), p. 54/128 頁)

<sup>49</sup> Hacking (2002), pp. 59-60/139 頁.

なり) ハッキングが保持し続け、それを歴史的な検討に生かしている点が翻って強調されているのである。

## 6. おわりに

本稿では、哲学史研究をめぐる4つの立場を、その範例となる哲学者を取り上げながら示した。第2節と第3節では、「合理的再構成」と「歴史的再構成」を対比的に検討した。前者はベネットを典型例として、現代の「問い」の下に過去の哲学者を対等の対話者として取り上げ、その解答の成否を判定するものであり、後者はスキナーを典型例として、哲学者当人の意図や置かれた文脈を可能な限り再現しようとするものであった。両者の峻別が難しい場合はあるだろうが、それでも解釈者は自身と受け取り手を混乱させないため、可能な限り「過去の哲学者が当人の関心の下に述べていること」と「解釈者の関心の下、過去の哲学者が述べていること」の解釈を通じて練り上げた解釈者自身の見解」とを区別しなければならない。

第4節と第5節では、合理的再構成と歴史的再構成を結び付ける手がかりとして、ローティの「精神史」とハッキングの「歴史的存在論」を対比的に取り上げた。前者が旧来の語彙を塗り替え、その多様化を目指すのに対して、後者は問いを構成する概念の前提条件を分析し、その出現と変遷をたどるものであった。両者の差異は分析哲学との距離で測られる。ローティが分析哲学から離れ、自己やその属する文化を記述する新たな語彙・物語を提案する「文化政治」として哲学を捉え直すのに対して、ハッキングはあくまで分析哲学者を自認し、概念の歴史的な分析を試みる。逆に両者に共通しているのは、過去との向き合い方が、自身の「哲学」という営みの理解と実践に直結している点である。ここに至って、哲学史との向き合い方が、哲学そのもののあり方をも規定しうるものが改めて理解されるのである。

むしろ、現実の哲学史研究においてはこれらが互いに混じりあいながら行われていくことが多いであろうし、実践方法がこの4つに限られるとも思われたい。それでも、自らの哲学(史)研究の実践を、ここで取り上げた立場と比較することは、己が目指すべき方向を見定める貴重な契機を私たちに与えてくれるだろう。

## 参考文献

- Árdal, P. (1977). Convention and Value, In G. P. Morice (Ed.), *David Hume: Bicentenary Papers* (pp. 51-68). Edinburgh University Press.
- Bennett, J. (1971). *Locke, Berkeley, Hume: Central Themes*. Oxford University Press.
- Bennett, J. (1984). *A Study of Spinoza's Ethics*. Cambridge University Press.
- Bennett, J. (2001). *Learning from Six Philosophers*. vol. 1, Oxford University Press.
- Flew, A. (1961). *Hume's Philosophy of Belief*, Thoemmes Press.
- Hacking, I. (1975). *Why Does Language Matter to Philosophy?* Cambridge University Press. (ハッキ

- ング, I. (1989). 『言語はなぜ哲学の問題になるのか』 伊藤邦武訳, 勁草書房.)
- Hacking, I. (2002). *Historical Ontology*. Harvard University Press. (ハッキング, I. (2021). 『知の歴史学』 出口康夫・大西琢朗・渡辺一弘訳, 岩波書店.)
- Hacking, I. (2006). *The Emergence of Probability*. 2nd ed. Cambridge University Press. (ハッキング, I. (2013). 『確率の出現』 広田すみれ・森元良太訳, 慶應義塾大学出版会.)
- Hacking, I. (2007). On Not Being a Pragmatist: Eight Reasons and a Cause. In C. Misak (Ed.), *New Pragmatism*. Oxford University Press.
- 井筒俊彦. (2019). 『意味の深みへ：東洋哲学の水位』 . 岩波書店.
- 松田克進. (2017). 「哲学史研究の哲学的意義：哲学史との間合いのとり方」, 『哲学』, 68, 9-27.
- 森直人. (2002). 「Q. スキナーと J. G. A. ポーコック：方法論的比較」, 『調査と研究』, 25, 85-101.
- Rorty, R. (1984). The Historiography of Philosophy: Four Genres. In R. Rorty, J.B. Schneewind and Q. Skinner (Eds.), *Philosophy in History* (pp. 49-76). Cambridge University Press, (ローティ, R. (1988). 「哲学史の記述法：四つのジャンル」 富田恭彦訳, 『連帯と自由の哲学』 (pp. 105-162). 岩波書店.)
- Rorty, R. (2007a). Intellectual Autobiography. In R. E. Auxier and L. E. Hahn (Eds.) (2010), *The Philosophy of Richard Rorty* (pp. 3-24). Open Court. (ローティ, R. (2018a). 「知的自伝」 富田恭彦編訳, 『ローティ論集：「紫の言葉たち」今問われるアメリカの知性』 (pp. 203-243). 勁草書房.)
- Rorty, R. (2007b). Analytic and conversational philosophy. In *Philosophy as Cultural Politics* (pp. 120-130). Cambridge University Press. (ローティ, R. (2018b). 「分析哲学と会話哲学」 富田恭彦編訳, 『ローティ論集：「紫の言葉たち」今問われるアメリカの知性』 (pp. 123-144). 勁草書房.)
- 関口正司. (1995). 「コンテクストを閉じるということ：クエンティン・スキナーと政治思想史」, 『法政研究』, 61, 203-274.
- Skinner, Q. (1969). Meaning and understanding in the history of ideas. *History and Theory*, 8(1), 3-53. (スキナー, Q. (1990). 「思想史における意味と理解」 半澤孝磨・加藤節編訳, 『思想史とはなにか：意味とコンテクスト』 (pp. 45-140). 岩波書店.)
- Skinner, Q. (1972). Motives, intentions and the interpretation of texts. *New Literary History*, 3(2), 393-408. (スキナー, Q. (1990). 「動機、意図およびテキストの解釈」 半澤孝磨・加藤節編訳, 『思想史とはなにか：意味とコンテクスト』 (pp. 141-168). 岩波書店.)
- Skinner, Q. (1988). A reply to my critics. In J. Tully (Ed.), *Meaning and Context: Quentin Skinner and his Critics* (pp. 231-288). Princeton University Press. (スキナー, Q. (1990). 「動機、意図およびテキストの解釈」 半澤孝磨・加藤節編訳, 『思想史とはなにか：意味とコンテクスト』 (pp. 141-168). 岩波書店.)
- 富田恭彦. (2016). 『ローティ：連帯と自己超克の思想』 . 筑摩書房.
- 朱喜哲. (2024). 『人類の会話のための哲学：ローティと 21 世紀のプラグマティズム』 . よはく舎.
- 植村玄輝. (2017). 「哲学史研究は哲学的かつ歴史的でありえるのか：過去の主張についての規

範的探究という観点からの提案」, 『哲学』, 68, 28-44.